

地域発・防災ラジオドラマ  
グループ名「鶴ヶ島市公民館運営審議会」  
タイトル 「地域発・ラジオ防災ドラマ in 鶴ヶ島市  
富士見地区」

《場面1：富士見公民館にて》

登場人物

飯野和広（富士見公民館長、50代）  
宮田誠二（富士見公民館職員、40代）  
市川志保子（同職員、40代）  
望月峯（富士見公民館サークルメンバー、60代）  
西村典子（同サークルメンバー、40代）  
田中都代（同サークル子育てネットつみ木メンバー、40代）  
小檜睦（同サークルカモミールメンバー、40代）  
妊婦A（同サークルメンバー、30代）  
B（聴覚障害者、50代）

プロローグ

鶴ヶ島市富士見公民館では、今日もサークル活動を終えた人たちがちよどろビーで立ち話をしていた。

突然の地震に悲鳴を上げ、一斉にテーブルの下にうずくまる人たち

事務室内で昼食をとっていた職員3人も突然の大揺れに動転。事務室内は一瞬にして書類が散乱。

パソコンは机の上で傾いている。

2階からも利用者の叫び声。「キャー」  
手すりにつかまってこわごわと下りてくる人たち

公民館職員の市川さんが利用者の安否を確認しに、事務室からロビーへ、1階の部屋、2階の部屋に行く。

公民館長は館外の状況を確認しに、施設の外へ

公民館職員の宮田さんは、電話が通じないので、防災無線を持ち、館外にて、市役所の安全安心推進課と連絡を取ろうとするが、混乱しているらしく無線が通じない。

公民館は鶴ヶ島市の地域防災計画の情報連絡拠点でもあるので、宮田さんは自転車でエリアの避難所である栄小学校、富士見中学校及び地域の被害状況を確認するため出かける。

富士見公民館ロビーで、職員中市川さんが利用者に呼び掛ける・・・。

市川：「みなさん、大丈夫ですか？落ち着いて下さい。」「怪我をした方はいますか。」「余震がくるかもしれないので駐車場に避難してください。」

公民館利用者を連れて、駐車場に誘導する市川。

館の外周の様子を確認した飯野館長が館内に戻り、館内の被災状況の確認をする。

2階の会議室のガラスが割れているが、1階の和室や保育室は安全である。図書室は本が離散しているが、本箱は倒れてはいない。

飯野館長：（大声で）「誰か残っている方はいますか？」

実習室から這い出てくるけがをした望月峯さんを発見

飯野館長：「あ、望月さん、大丈夫ですか？」

望月：「実習室はものが散乱しているわ。転んで足に怪我をしているみたい・・・」

飯野：「立てますか？」

望月：「何とか立てると思います」

と、言いながら飯野館長につかまりながら立ち上がる望月さん

飯野館長：「ちよっとそのまま待ってて。車いすを持ってきますからね。」

ふらつく望月さんを車いすに乗せ、駐車場へ。そこで応急処置をする。しかし、望月さんの出血が止まらないため、同じサークルの西村さんが付き添って富士見2丁目の井上医院へ連れて行く。

駐車場では……。

(田中さんは学校と幼稚園に行っているわが子を案じて)

田中：「うちの子供たちは大丈夫かしら？」

(小檜さんは携帯電話をしきりに操作している)

小檜：「さつきから携帯が通じない。うちの家は古いから心配だわ。」

みんな不安な顔をしている。

市川：「まだ余震がくるかもしれないし、道路状況もわからないので、市役所の方から情報が入ってくるまでしばらくここにいてください。」

(片手で子どもの手を引き、もう一方の手でお腹をさすりながら)

妊婦のA：「私は大きなお腹だし、少し横になりたいのですが……。」

市川さんと館長が相談して、和室にいてもらうこととする。

市川：「じゃあ、和室が安全そうなので、お子さんとそこに居てくださいね。」

サークルに参加している聴覚障害者のBさん、メールが通じず家族に連絡が取れずに心配な様子で、「自分の家族と連絡を取りたいのですが。なんとかできませんか」と筆談してきている。

市川さんからその報告を受けた飯野館長が市役所に連絡を取ることとした。本部に連絡を取るが、障害福祉課は初動体制への対応で出払っていて連絡が取れないとのこと。

そのことを飯野館長が告げると、落胆して、心配な様子のBさん

## 《場面2：富士見地域の状況》

### 登場人物

班長の妻

副班長  
母親C  
高齢の男性D（80代）  
安瀬 祐（避難所に向かっている男性、60代）  
青柳裕子（犬を連れた女性、60代）  
鶴巻進一（富士見自治会 防災担当の役員）

### プロローグ

ここは、富士見公民館エリアの自治会の様子  
富士見自治会では、自治会加入者は、災害時の約束事として身の安全を周囲に知らせるため、軒先に黄色い旗を出すこととなっている。いわゆる黄色い旗運動である。

班長が仕事で不在のため、班長の妻と副班長が、担当班員の約10軒を半分ずつ、黄色の旗の確認に出かけた。

班長の妻、黄色い旗が出ていない家を発見  
ドアのチャイムを押しても誰も出てこない。  
ドアを強く叩いたらようやくやくドアが開いた。

班長の妻：「旗が出ていないけどどうしましたか」

（ややパニック気味で）

母親C：「子どもが怪我をしちゃって。」

2歳くらいの子どもが、頭から血を出し、泣きじゃくっている。

班長の妻：（子どもに）「大丈夫？大丈夫？痛いよね。でも我慢してね。」

と子どもをやさしく抱く。

班長の妻は、すでに栄小学校で避難所の設営を始めている富士見自治会防災担当の鶴巻さんに携帯電話で指示を仰ぐ。

班長の妻：「お母さん、しっかりしてくださいね。出血しているので、応急手当が必要ですよ。栄小学校におんぶして連れて行ってください。向こうに救護班ができていますから、診てもらってください。大丈夫です。」

副班長は、もう一軒の旗の出ていないお宅に急いで向かう。  
ドアをたたいても出てこないの、庭に回り、ガラスをたたく。  
鍵がかかっていないので中に入る。

奥さんは不在の様子

副班長：「Dさん、Dさん、旗が出ていませんけど、大丈夫ですか？」

(ゼイゼイ言いながら)

D：「オレは、酸素ボンベが必要なんだ。胸が苦しいので、悪いがその酸素ボンベをとってくれ。」

あわてて酸素ボンベをDさんに持っていく副班長

副班長：「まず落ち着いて、酸素を吸入して呼吸を整えて。ここは危険ですから  
栄小に避難しましょう。歩けますか？」

(つらそうに)

D：「歩けないよ。」

副班長：「どうしよう・・・。(困ったように)」

(副班長、少し考えて)

副班長：「分かりました。自治会のリヤカーをもってくるから待っててください  
ね」

副班長：(外に出て、大声で、通っている人に向かって)「誰か協力してもらえ  
ませんか？病人を運ぶので自治会館からリヤカーを持ってきて欲  
しいんだけど。」

(がやがやという人々のざわめき)

栄小学校に次々に避難していく市民・・・。

「自治会館の場所が分かりません」と言っ通り過ぎていく人もいる。  
そんな中、避難所に向かっていている安瀬祐さんが近づいてきた。

安瀬：「私が持つてきましょう。リヤカーは自治会館のどこにありますか？」

副班長：「倉庫の中に折りたたみのリヤカーがあります。倉庫には、鍵はかかっ  
ていませんから。」

(しばらくして、安瀬さんがリヤカーを組み立てて、引いて戻ってくる。副班長がお礼を言ってリヤカーを受け取る)

副班長：「Dさん、リヤカーに乗ってください。栄小学校に行きますよ。安瀬さんも一緒にお願ひできますか。」

副班長は、安瀬さんの協力を得て、栄小学校へ無事、酸素ボンベ使用の男性Dを連れて行く。

(栄小学校の校門の前)

副班長たちがリヤカーを引いて栄小学校の校門に入ろうとしたところで、犬を抱いて不安げな高齢の女性青柳さんに出会う。

(切羽詰まった様子で)

青柳：「すみません、犬を栄小学校に連れて避難所に入りたいたのですが……。この子は家族同様ですので、家に置いておくわけにはいかないんです。家の中はものが落ちて足の踏み場もないほどになっているので、避難所でも一緒にいたいんです。」

副班長：「そうですか？気持はよくわかりますが、避難所に動物はどうでしょうかねえ。運営委員の鶴巻さんに聞いてみましょう。」

(安瀬さんは、この間に、リヤカーのDさんを連れて避難所の中に入る)

避難所の運営で忙しい鶴巻さんのところに駆け寄る副班長。  
鶴巻さんも手を止めて、副班長の話に耳を傾ける。

(意を決したように)

鶴巻：「犬、猫の嫌いな人もいるし、アレルギーの人もいるし、トラブルのもとになる可能性もあるので困ったなあ。ちょっとみんな話合ってみよう。他にもペットを連れてくる人があると思うから……。」

避難所運営委員の主だった者で検討した結果、栄小学校内の一角にペット専用のコーナーを設置することになり、副班長にその旨、連絡する。

副班長、校門のところで待っている、ペット連れの青柳さんにその旨を伝える。

青柳：「この子は家の中で飼っているので、外の専用コーナーではとても心配だわ。他の犬と一緒にだとなおさらだわ。」

副班長：「とにかく、中に入りましょう。あとのことは、鶴巻さんに相談しましょう。」

二人、栄小体育館の外に設置されているペットコーナーに行く。そのペットコーナーを見て、青柳さんは強く拒絶する。

(興奮しながら)

青柳：「こんなところにうちの子をおいておけないわっ！1教室ぐらい、犬と一緒に過ごす部屋をつくったっていいでしょ！！」

困惑する避難所運営委員の人たち・・・。

### 《ふたたび、地震発生3時間後の富士見公民館でのシーン》

#### 登場人物

谷沢里子 (富士見中学校地域対応部市職員、20代)

飯野和広 (富士見公民館長、50代)

宮田誠二 (富士見公民館職員、40代)

#### プロローグ

富士見中学校は、栄小学校に比べて住民による避難所運営の設営が遅れているため、松井校長が避難所を指揮している。

富士見中学校から地域対応部の市職員の谷沢さんが中学校の状況と障害者・高齢者の富士見公民館への受け入れを要請に富士見公民館にやってくる。

鶴ヶ島市では、災害時には、各避難所の近くに住んでいる市職員が地域対応部職員として配置されているが谷沢さんもその一人である。

谷沢：富士見中学校の状況です。富士見中学校では、全校生徒280名中保護者が迎えに来た110名が帰宅、残り170名は各教室にて待機しています。生徒に負傷者はいないそうです。

避難者の状況は、約30名くらい負傷者がいそうです。そのうち2名の重症者については坂戸中央病院に救急搬送しました。

富士見中の避難所では障害者や高齢者などの受け入れは難しいので、富士見公民館で受け入れていただけませんか。」

飯野：「わかりました。すでに妊婦さんや病人を受け入れていますので、こちらを要援護者支援対応の避難所としたいと思います。」

その時、市の災害対策本部から富士見公民館の無線に連絡が入る。

市災害対策本部：「富士見地区の避難所の状況について報告をお願いします。」

飯野館長：「富士見公民館は、今から二次避難所として障害者等要援護者を中心に受け入れることとしました。栄小学校、富士見中学校の状況はそれぞれの避難所に確認してから報告します。」

宮田さんが避難所の現況を確認するために、再び、栄小学校、富士見中学校に自転車で出かける。

(30分くらいして)

地域の避難所である栄小学校と富士見中学校から帰ってきた宮田さん

宮田：「飯野館長、栄小学校は避難所が順調に運営されています。市民の避難受け入れができています。富士見中学校は遅れています。」

飯野：「はい、お疲れ様」

(この報告を受けて、直ちに災害対策本部に連絡を取り、小中学校の現況を伝える飯野館長)

飯野館長：「栄小学校は地元自治会が中心となり避難所運営が順調に進んでいます。富士見地区の情報もよく集約されています。富士見公民館から栄小学校に情報連絡拠点を移した方が富士見地区の避難所運営がスムーズにいくと思いますが・・・。」

市災害対策本部：「了解しました。公民館では要援護者の支援に努めてください。何か手助けは必要ですか。」

飯野：「妊婦さんもおりますので、保健師の派遣をお願いします。」

## エピソード

こうして富士見地区では、情報連絡拠点を栄小学校に移し、地元自治会が中心となった避難所運営が行われるようになった。富士見公民館には市の災害対策本部から保健師が派遣され、要援護者の避難生活を支えることとなった。

なお、このドラマはフィクションですが、登場人物は公民館運営審議会委員をはじめ、実在する方々によるものです。